

仏道の 八不思議

お釈迦様の教えの特色

パハーラーダ スッタ

Pahārāda Suttaṃ

Ven. Alubomulle Sumanasara Thero

アルボムッレ・スマナサーラ長老

仏道の八不思議

お釈迦様の教えの特色

アルボムッレ・スマナサーラ長老

日本テーラワーダ仏教協会



仏道の 八不思議

お釈迦様の教えの特色

パハーラーダ スッタ

Pahārāda Suttaṃ

アルボムツレ・スマナサーラ長老

Ven. Alubomulle Sumanasara Thero

日本テーラワーダ仏教協会

編 集 出村佳子
装丁・DTP 勝山昌幸
企画進行 杜多千秋



Namo tassa
bhagavato arahato
sammā sambuddhassa

阿羅漢であり
正自覚者であり 福運に満ちた
世尊に礼拝したてまつる

はじめに

「初期仏教経典」というお釈迦様の^{じきじき}直々の教えから、一つ経典をご紹介します。

経典には「仏教とは何か」というお釈迦様の教えの特色を示しているエピソードがいくつかあります。多くの方々は、「仏教って一体どんな教えなのか？」と疑問に思ったことが一度はあるのではないのでしょうか。といいますのも、仏教はまったく宗教的ではないからです。祈祷やお祓いなどはやりません。仏教以前からある伝統的なしきたりや習慣も、全部くつがえしてしまうのです。たとえば、インド文化では年上の人を尊敬しなくてはなりません。年上の人があると、立ち上がって深く礼をしなければならないのです。この習慣は現代になっても続いていて、年上の人にたいしては必ず挨拶をします。お釈迦様は、そのようにはやりません。年齢ではなく、人間の道徳性を重視されたのです。つまり尊敬し、礼をすべき人とは、「道徳的に優れている人である」と教えられました。このようにして、あらゆることをくつがえされたのです。

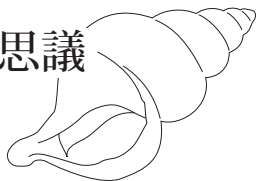
しかし、そういうことをしながらも、お釈迦様は宗教家として出家し、托鉢をしながら、何もモノを持た

ずに生活しました。

ですから、仏教を学ぼうとする方々にとっては、お釈迦様は宗教家か、あるいは革命的な生き方を教える人か、どちらかわからなくなるのです。それで「仏教って何なのか？」という疑問が出てくるのです。

経典には「仏教はこういうものである」と紹介する教えがいくつかあります。この『パハーラーダ経』も、その一つです。お釈迦様ご自身が、自分の教えはどのようなものかと説明されているこの経典はとても貴重な記録であり、皆様にも大いに役立つでしょう。

大海の八つの不思議



阿修羅は大海が好き

パハーラーダ (Pahārāda) という名の阿修羅がいました。

まず、「阿修羅」とは何かを考えてみましょう。阿修羅はパーリ語で asura と言います。asura の sura は「神」という意味で、asura の a は「無」または「非」、いわゆる否定するときの接頭辞です。この二つの語を合わせると、「非神」とか「無神」となりますが、そういういまでも、阿修羅は神の一種ですし、意味がよくわかりません。

ギリシャ神話には神々がいて、その神々と戦うもう一種の神々がいます。この神々と戦う神々のことを「タイタン族」と言います。asura はちょうどこのタイタン族のような存在で、英訳するときには「タイタン族」とすることもあのです。

仏教では、阿修羅は神霊の一種とされ、仏典にときどき登場しています。

この経典は、お釈迦様がヴェーランジャー街のナレールプチマンダ樹の下に座っていたとき、パハーラーダ阿修羅と対話した記録です。ナレールプチマンダというのはどのような種類の樹かわかりませんが、その樹の下に座っていらっしやったときの対話です。

パハーラーダが、お釈迦様に礼をしました。そうすると、お釈迦様は先にパハーラーダにこのように尋ねました。

「君たち（阿修羅たち）は大海が好きですが、それはなぜですか？」

パハーラーダは答えました。

「尊師よ、大海には八つの不思議があります。だから我々は大海が好きなのです」

そして、八つの不思議を次のように説明しました。

1 | anupubbaninno anupubbapoṇo anupubbapabbhāro ,
| na āyatakeneva papāto

大海は徐々に深くなる。最初から深淵ではない。

大海というのはだいたい徐々に深くなるのであって、崖のように突然ガクンと深くなるわけではありません。これが大海の不思議なところの一つです。

2

mahāsamuddo ṭhitadhammo velaṃ nātivattati

大海は安立している。決して岸を超過しない。

川とは違います。川は突然洪水になって民家を台無しにすることもあります。海はそのようなことはありません。落ち着いていて安定しています。(でも、津波の場合はどうですかと聞かないでください。阿修羅たちはそこまで細かく考えていないようです)

3

mahāsamuddo na matena kuṇāpena saṃvasati

大海は死骸や腐敗物と同居しない。腐敗物をたちまち陸に捨てる。

大海は、死骸や腐敗物などの汚い物とはまったく関係がありません。すぐに捨て去ります。たとえばクジラが死んだら、その死骸は波に流されて、どこかの陸にあげられるように。

(そうはいつでも、実際のところ、陸にあげられる前に他の魚に食べられる生き物もいくらでもあります。パハーラーダはそこまで考えて言っているわけではなく、ただ陸から海を眺めたときに見える自分の感想をちょっと述べているだけです。海を眺めていると死骸などが陸にあげられるのが見える、そのことを言っているのです)

4 | yā kāci mahānadiyo, seyyathidaṃ-gaṅgā yamunā
aciravatī sarabhū mahī, tā mahāsamuddaṃ patvā
jahanti purimāni nāmagottāni,' mahāsamuddo' tveva
saṅkhaṃ gacchanti

ガンガー、ヤムナー、アチラワティ、サラブー、マヒー
などの大河は大海に流れ、どの大河もたちまち元の
大河の名前を捨てて、一つの「大海」になる。

これも大海の不思議の一つです。ガンガー、ヤム
ナー、アチラワティ、サラブー、マヒーなどの大河は、
インドにある大きな河です。現在もあります。ガンガー
は大変有名で、インド人にとっては河の王様のような
河です。「ガンガー」はそれ自体が「河」という意味で、
ヤムナー、アチラワティ、サラブー、マヒーなどの
ように個々に名前が付いているわけではありません。
「河＝ガンガー」なのです。日本語では「ガンジス河」
としてよく知られています。

そこで、あちらこちらからいろいろな河が大海に流
れ込んできますが、大海に入った時点で大海に溶け込
んで混ざり合い、元の河は何かということがまるっき
りわからなくなるのです。これも大海の不思議なところ
の一つです。

5 | yā ca loke savantiyo mahāsamuddaṃ appenti yā ca
antallikkhā dhārā papatanti, na tena mahāsamuddassa
ūnattaṃ vā pūrattaṃ vā paññāyati

世界中の河々が大海に流れ込み、また空からは雨が降り落ちてくる。しかし大海は減ることも増えることもない。

世界中のいろいろな河々が海に流れ込んでいきますから、海の量は増えるはずですが、でも、全然増えません。湖には増えたり減ったりする現象はありますが、海にはないのです。

また、空から降り落ちてくる雨の量は相当なものです。ちょっと豪雨になると、陸では災害にもなるほどですから。でも、大海は増えたり減ったりすることもなく安定しています。これも大海の不思議なところの一つです。

6 | mahāsamuddo ekaraso loṇaraso

大海の味は一貫して塩味である。

世界中どこでも大海の味は塩味です。

7 mahāsamuddo bahuratano anekaratano

大海には大量の宝物がある。

大海には真珠や瑠璃、真珠母貝、石英、珊瑚、金、銀、水晶、猫目石などの宝石がいろいろあります。おそらく昔のインドの人たちは、海の深いところには様々な宝物がいっぱい眠っていると想像し、海に憧れていたのでしょう。

現代科学から見ても、海には金、銀、銅などが大量に溶けていますが、残念ながら工業的にとり出すことができません。海の中にはかなりの財産があります。ただ使えないだけなのです。

8 mahāsamuddo mahataṃ bhūtānaṃ āvāso

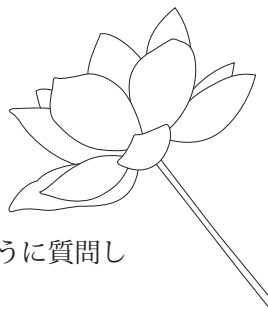
大海は巨大な生命の住処である。

大きな身体を持つ生き物は、だいたい海に生息しています。経典にはその生き物の名前がいくつか列挙されていますが、ただ現代ではクジラ以外の生き物はみんな絶滅していますし、名前を挙げて私たちにほんのりとした生き物かわかりませんから、ここでは省略いたします。

このようにして、パハーラーダ阿修羅は「大海には八つの不思議があります。だから我々は大海が好きなのです」と答えました。

私の個人的な感想としましては、インド人、とくにインドの中央部に住んでいる人たちにとっては、海は未知なるもので、一生海を見ないという人はいくらでもあります。そういう人たちは海を神秘的なものだと考えて、海に憧れるのです。ですから「海は不思議」といいましても、そこに何か特別な神秘的な意味があるのではなく、ただ「海はいいなあ、不思議だなあ」と憧れている程度のもので不思議なのです。

仏道の八つの不思議



次に、パハーラーダはお釈迦様にこのように質問しました。

「尊師よ、我々が大海が好きのように、比丘たちは教えが好きで、喜びを感じて修行をしているのでしょうか？」

お釈迦様は答えました。「仏弟子たちは仏道に満足して修行しています」

パハーラーダはお釈迦様に尋ねます。「尊師よ、比丘たちが満足して修行する仏道の不思議なことは、いくつありますか？」（そんなに満足するということは、何か不思議なことがありますか？ それはいくつありますか？）

お釈迦様は答えました。「パハーラーダよ、大海に八つの不思議があるのと同じように、仏道にも不思議な特色が八つあります」

これは仏典の教え方の一つです。相手が大海の不思議を「八つ」言いました。そこでお釈迦様も、「八つ」の項目をあげて、仏道の不思議（特色）を説かれるのです。

智慧を徐々に完成する段階的システム

1

Imasmim̐ dhammavinaye anupubbasiikkhā
anupubbakiriyā anupubbapaṭipadā, na āyatakeneva
aññāpaṭivedho.

大海は徐々に深くなる。最初から深淵ではない。この教え（仏教）も、徐々に学び、徐々におこない、徐々に実践するものである。初めから（突然）解脱に達するのではない。

【解説】

仏教の道は、幼稚園から大学卒業まで進む教育システムのようなものです。仏道の良いところは、どんな人でもその道を歩めば「最終解脱に達する」というところです。ですから、自分には能力がないなどとあきらめる必要はありません。この道に入ったら、最初からきちんと学ばよいです。

仏教は教えを整理整頓して教えています。ですから、学んでいくうちに知識は発展していきますし、膨大な量の真理の知識が頭に残るのです。自分でも、ここまで知っているのかと不思議になるほどいろいろなことが理解できるようになるでしょう。世俗の勉強はむずかしいですし、つまらないし、やりたくないかもしれ

ません。でも、仏教は最高の教育手段を使っていますから、いやな気分にはなりません。まじめに勉強するなら、やる気は自然に湧いてくるのです。

むかし西洋では、「神の教えこそが唯一正しい教えだ」ということを仏教の国々にも布教しようと考え、西洋の研究者たちは「敵を知る」ために仏教を研究しました。それでどうなったかといいますと、仏教の研究がおもしろくてやめられなくなり、結局、一生かけて仏教を研究し、たくさん論文を書いて発表するようになったのです。それで仏教はキリスト教に潰されるどころか、逆に西洋のキリスト教社会にも広がっていききました。仏教を最初に西洋に紹介したのは牧師さんや神父さんなどキリスト教の聖職者たちです。仏教を勉強するとどれほどおもしろくなるかということが、このエピソードで理解できると思います。

仏教はしっかり人を育てます。それも、その人に何も負担をかけないようにして、なんのことなく段階的に進むようにするのです。だから初期仏教を知っている人は、子供でも論理的なものごとを考えます。これは仏教の特色で、仏教を学んだら、けっこう大物になるのです。

仏教は、学ぶ人の心を徐々に向上させます。大きく三つの段階に分けることができます。まずは

「anupubbasiikkhā」です。悪行為は何か、善行為は何か、親孝行をすること、道徳を守ることなど、仏教の基本的なところを学ぶことです。次に「anupubbakiriya」^{おこな}です。これは行なうことで、生活習慣や行動をいろいろ正していくことです。それから「anupubbapaṭipadā」です。実践面でも最初のステップから始めて順々に進んでいきます。そして最後に覚りに達して解脱に至るのです。

他宗教の場合は、だいたい一発で最終目的に達せられるようなニュアンスで語られているようです。それも神を信じたり、懺悔したり、祈ることなどの単純な行為のみで最終目的に達せられます、と。ヒンドゥー教も同じで、簡単な行をおこなう^{ぎょう}だけで十分だと考えているようです。一部に冥想も必要だと言う人がいますが、その冥想法も徐々に成長していく冥想ではなく、まず神と靈魂を信じ、その後、冥想を通じて神秘体験するという冥想です。うまくいったなら、神と靈魂が一体になったと満足して終了するのです。

仏教の冥想は、このような神秘体験を目指すものではなく、智慧を徐々に開発して、完成へと導きます。それから解脱に達することで、修行を完了するのです。最初から無理な修行は求めています。まずは誰にとっても実践しやすいところから始めて、成長するにした

がって修行の中身を深めていくという方法です。ですから、仏道は誰にとっても実践しやすい道なのです。

お釈迦様は今から 2550 年以上も前に、ご自身が発見された「覚りへの道」を段階的なシステムにして、人々にわかりやすく教えられました。これが仏教の第一番目の不可思議なところなのです。

持戒で優柔不断を断ち切る

2 Yam mayā sāvakānaṃ sikkhāpadaṃ paññattaṃ taṃ
mama sāvakā jīvitahetupi nātikkamanti.

大海が安立して岸を超えないように、仏弟子たちは命にかえても戒律を守る。

【解説】

お釈迦様の弟子たちは、自分の命よりも大事に戒律を守ります。戒律の意味を理解している人は、自分の命よりも大事に戒律を守るのです。

ここは理性に欠けている人々にとっては誤解しやすいポイントですので、注意が必要です。たとえば誰かが「断食は戒律であり修行である」と言ったとしましょう。命よりも戒律を大事に守るという場合には、どんなに空腹で死にそうであっても「断食をやめます」と

いう態度はとれません。それで、死ぬ羽目になってしまします。お釈迦様は、このような苦行めいた常識^{はず}外れの戒律は定めていません。お釈迦様が定めたのは、理性のある人なら誰でも正しいと言わざるをえない戒律・道徳なのです。

仏道に入って最初に学ぶべきことは、戒律・道徳です。これは盲目的に守るのではなく、戒律や道徳は何のために、何を目指して守るのかと、その意味をしっかりと理解して、実践するのです。意味や目的を理解して納得すると、戒律を守る勇気が湧いてきます。他人に誘惑されて戒律を犯すような優柔不断な人間ではなくなるのです。

戒律・道徳は、人間が自分たちの好みで編み出すものではありません。生命の法則を理解するなら、自然に成り立つものだということがおわかりになるでしょう。お釈迦様が定めても定めなくても、道徳は普遍的に成り立つものなのです。たとえば「不殺生戒」という戒律について考えてみますと、なぜこの戒律があるのでしょうか？ それは、どんな生命も「死にたくない、殺されたくない」という気持ちがあるからです。「殺さないでくれ」と必死に泣いている生命を殺すのは、すごく残酷なことではありませんか？ それで「殺してはならない」ということが自然法則として善い行為

になるのです。殺されたくない、死にたくない、という気持ちは、どんな生命にもあります。これは生命の法則の一つです。この法則によって、「殺さない」ということが自然に善い行為になるのです。したがって、不殺生戒は人が人為的に定める必要はないのです。

でも、私たちはそうした法則など知りません。知ったとしても、無視します。自分さえよければいいという我儘^{わがまま}な気持ちで、自分の勝手な都合で、他の生命を殺すのです。気持ち悪いから殺すとか、イヤだから殺すとか、迷惑だから殺す、人に何か言われたから殺す、楽しいから殺す、趣味だから殺す、敵だから殺す、殺される前に殺す、食べるために殺すなど、まったくいい加減な言い訳を付けて殺します。最近は、「殺したいから殺す」という恐ろしい人間も現れているほどです。ですが、被害者になる生命は当然のこと殺されたくはありません。ということは、殺生は自我のあらわれです。「自分こそが偉い」「自分だけに生きる権利がある」などという高慢や邪見のあらわれなのです。

そこで、「殺生しない」と決めた人は、心から徐々にこの自我の錯覚が消えていきます。高慢も邪見も無くなって、心が清らかになります。他の生命を殺さない人は、他の生命にとって安らぎを感じるやさしい人間になるのです。

この意義が理解できると、「たとえ自分が殺されそうになったとしても他の生命を殺さないことが正しい生き方だ」ということが納得できるでしょう。このようにアリ一匹にたいしてもその命を尊重し、殺意を持たない人のことを、他の人は殺すことなどできません。それでも、極悪人が殺そうとするかもしれません。その場合も、不殺生戒を守っている人は、その人にたいして怒りも憎しみも起こりませんし、恐怖感さえ起こりません。代わりに、無知で悪行為をする相手のことを心配して憐れむのです。どんな人でも、どんな極悪人でも、自分のことを心配してくれる人のことを殺すことなどできません。それで命が守られるのです。ですから「戒律を命をかけて守ります」が、それは決して「修行という名目でおこなわれる自傷行為」にはならないのです。

戒律の例として不殺生戒を挙げましたが、不殺生戒以外の戒律も、学んでみると、すべて自然に成り立つものであるということが理解できるでしょう。ですから当然、自分の命よりも大事になるのです。在家の方々にとっては理解するのがむずかしいかもしれませんが、もし「自分の命よりも戒律が大事」という気持ちで戒律を守るなら、戒律の威力をありありと感じる

ことができるでしょう。

出家には多くの戒律があります。それらも「自分の命よりも大事」というスタンスで守らなくてはならないのです。ただ、戒律を守ることがどうしても無理だと弱気になった人には、還俗する自由も与えています。

仏教は芯の弱い人を強くします。優柔不断をなくし、確信を持って生きる強い人間をつくります。無知な人に誘惑されない強い精神をつくります。戒律を守る人には、落ち込みや悩みはないのです。

サンガはオープンなのに汚れない

3 | *yo so puggalo dussīlo pāpadhammo
asucisaṅkassarasamācāro paṭicchannakammanto
assamaṇo samaṇapaṭiñṇo abrahmacārī
brahmacāripaṭiñṇo antopūti avassuto kasambujāto, na
tena saṅgho saṃvasati; khippameva naṃ sannipatitvā
ukkhipati.*

大海が死骸や腐敗物と同居しないのと同じように、道徳がなく、悪に染まり、隠しごとのある出家・修行者の偽者、(心の) にせもの 中身が朽ちている者から、サンガは離れる。

【解説】

簡単に言いますと、サンガ（僧団）の中にあやしい者や疑わしい者がいれば、サンガはその人を仲間に入れませんが、という意味です。

出家の目的は、はっきりしています。真理を発見して解脱に達することです。出家する際、出家を請うときの言葉がありまして、「輪廻の苦しみを超えて涅槃に達したいので、出家させてください。お願いします」と言わなければなりません。しかし口ではそのように言っているけれども、心の中で別の目的をもって出家する人もいるのです。

たとえば、インドでは修行者は托鉢をしますが、托鉢をしても、それほど貰えるということはありません。でも仏弟子は貰えるのです。なぜかはわかりませんが、仏教の場合はあまり困ったことがないのです。それを見て、「仏教の出家グループに入ったら食べ物と住む所は心配しなくてもいい。楽に生活できる」などと考えて、いい加減な気持ちで出家する人もいるのです。また「僧侶は格好いい。一般の人々から尊敬される」などと尊敬や名誉、利益を得るために出家する人もいます。お釈迦様の時代でも、仏教を破壊する目的や教えを盗む目的で出家した人もいました。そういう人たちは、出家のグループに入ってから、かなり迷惑をか

けたのです。

他宗教の人や何か信仰をもった人が、いきなり仏教の出家グループに入ると、困ります。なぜなら、教えの内容がまったく異なるからです。そこでお釈迦様は、一般の人が出家したいと言ったらだいたいOKしますが、他宗教の人や修行者が出家したいと言ったら、すぐにはOKせず、代わりに仮に出家を認める仮出家を与えました。まず調べるのです。三か月間、出家ではなく仮出家としてサンガといっしょに生活し、その間お坊さんたちはその人のことを見ています。見ているといいましても、出家したら集団の中で生活しますから、隠しごとは一切できませんし、隠れて食べたりとかもできません。プライベートは全くない世界で、みんなザッと一緒にいるのです。いつでも誰でも見ているのですから、特別に見張り役をつける必要もありません。それで三か月間が終わって、その人に何も問題がなかったら、出家を認めます。そこまで気をつけていたのです。

それでも、仏教はオープンですから、汚れた目的を持つ人たちがサンガに入ります。そうすると、仏教は壊れてしまいます。それらから仏教を守らなくてはなりません。そこでお釈迦様はこのようになされました。極重罪 (pārājika) を一つでも犯したら、本人

が報告しようが、隠そうが、他人に知られようが、それに関係なく、その人はサンガの一員としての資格を完全に失うということです。追放されるのです。お釈迦様はそういう人がいるなら追い出してくださいとおっしゃいました。あなたは関係ないから外へ行ってくださいと。

戒律を破ると、修行は進みませんし、覚ることもできません。これは当然のことです。戒律を破ったということは、仏教にたいする信頼性がないか、自分にたいしてあまりにも甘いか弱いかのどちらかです。自分にあまりにも執着がありすぎて戒律を破り、それでも冥想すれば覚れますよ、ということは絶対にありえません。戒律は仏道の基盤となるものですから、戒律を破る人は、その時点で仏道から外^{はず}れていますし、サンガの一員ではないのです。

この三番目の項目は、二番目の項目の「大海が安立して岸を越えないように、仏弟子たちは命にかえても戒律を守る」の内容と反対のことを言っているのではないか、と思われるかもしれません。前の項目では「仏弟子は自分の命よりも大事に戒律を守ります。戒律は破りません」という内容でしたが、こちらでは仏弟子の中で「戒律を破る人」のことを言っているのです。「破りません」と言ったのに「破ってしまう人」のことです。

戒律を破った時点で、あるいは戒律を破る目的で出家した時点で、その人はあやしい者です。あやしい者がサンガに入ることはいくらでもあります。海にも、汚いものは流れて来ます。海にはそれを阻止することはできません。ゴミや死骸が流れ込んで来るのをどうやって阻止できるでしょうか？ できないのです。でも、海に流れ込んで来たものは、海はきれいさっぱり捨て去ります。同様に、仏教のサンガの組織もオープンですから誰でも出家することはできますが、心が汚れている者や戒律を破った者は、なんのことなく外へ追い出されるのです。

誰もが「平等」な世界

4 | Evamevaṃ kho, pahārāda, cattārome vaṇṇā - khattiyā, brāhmaṇā, vessā, suddā, tetathāgatappavedite dhammavinaye agārasmā anagāriyaṃ pabbajitvā jahanti purimāni nāmagottāni, 'samaṇā sakyaputtiyā tveva saṅkhaṃ gacchanti.

ガンガー、ヤムナーなどの大河が大海に流れても、すべて潮になるように、四つのカースト（王家、バラモン、商人、使用人）が仏道に出家したら、古い氏名を捨てて、皆「釈迦子沙門」になる。

【解説】

インドの社会にはカースト制度があり、王家、バラモン、商人、使用人の四つの階級に分けられています。

「王家」というのは、土地の権利を持っている人、いわゆる地主のことです。インドでは現代日本のように誰でも土地を購入できるということはありません。一部のカーストが土地の権利を握りしめているのです。インドへ行ってみると、見るかぎり農業が盛んなのですが、実際に農業に携わっている人たちは自分の土地を少しも持っていません。土地はすべて大金持ちの地主のものなのです。ですからここでは「王家」と訳されていますが、それよりも広い意味を表す「地主」と訳したほうがよいと思います。

それから、「バラモン」というのは聖職者のこと、「商人」というのは普通の人のこと、「使用人」というのは召使いや奴隷のことです。

これらどのカーストからも、仏教に出家することができます。仏教にはカースト制度はありません。出家したらみんな自分の名前を捨てて、お釈迦様の弟子である「釈迦子沙門」になるのです。パーリ語の「sakyaputtiyā」とは、お釈迦様の息子たち（子供たち）という意味です。家が変わりましたから、在家のときに持っていたものはすべて捨て去ります。地位や身分、

それから名前さえも捨てるのです。それで仏教の中ではカースト制度や差別制度は成り立たないのです。

仏教は、人間の差別を厳しく批判しています。世間の差別やカースト制度などは一切認めません。経典の中には差別を否定しているものがいくつかありますが、そこには驚くほど強烈に記されています。当時のバラモン人たちは「自分のカーストこそが一番偉い」と考えて、それだけで何もしてませんでした。「我々は何をやっても神の子だからOKだ」と考えて、いい加減に生活していたのです。お釈迦様は、このバラモン人のカースト意識にたいして徹底的に批判していました。これはスッタニパータの経典に普遍的に説かれています。たとえば、動物は生まれたその時点でそれぞれにカーストがあります。ネコはネコのグループ、ゾウはゾウのグループ、ウサギはウサギのグループなどと。生まれによってすでに「差」が成り立っているのです。しかし、人間の場合は皆同じです。生物学的に見ますと、動物には多くの種がありますが、人間は一種しかありません。そこで、バラモン人は自分のことを偉いと言っていますが、何が偉いのですか？ 他のカーストと何か違うのですか？ 人間としてやっていることはまったく同じではないですか？ 人間なら「^{おこ}行ない」を見なさい。卑しい行ないをする人は、そ

の卑しい行ないによって、卑しい人になります。優れた行ないをする人は、その優れた行ないによって、優れた人になります。だから優れた行ないをしてください。「自分のカーストが上だ」と思うこと自体が汚れた思考です。そう思った時点で、その人はもうとっくに卑しい人間になっているのです。

人を差別した時点で、自分が卑しい人間になります。人に指を指す^きのではありません。人に向かって、格好悪いとか、気持ち悪いなどと言うことは、相手を差別していることです。人を差別する気持ちを持っているから、相手よりも差別した自分のほうが卑しくなっているのです。

人間は皆平等です。仏教では社会のどんな立場の人が出家しても、元の家の名前を捨てて出家の名前で生まれ変わり、仏弟子としてサンガの一員になります。どんな民族でも、どんな肌の色の人でも、いったん仏教に出家したら、みんな「仏弟子」なのです。名前も変わります。西洋人が出家しても、アフリカ人が出家しても、日本人が出家しても、誰が出家しても、みんな仏教のパーリ語の名前になるのです。

これって一般の社会では不思議なことです。俗世間では上下関係が激しく、差別はなくなっていない。多くの宗教組織も同じです。キリスト教は厳密な縦の

関係ですし、イスラム教はそれほど厳しくありませんが、それでもやはりサウジアラビアにはイスラム教のメッカがありますから、一番優れていると考えられています。他の国々の格が低いのです。日本の新興宗教組織なども決まって縦の関係で、一番トップには開祖様の家族以外だれも入れないようになっていることが多いようです。

大乘仏教では衣の色や形で格差を付けています。これは初期仏教では禁止しています。衣は変えてはいけません。出家者は誰でもみんな同じものを着なくてはならないのです。

お釈迦様が教えた仏教には、差別は微塵もありません。仏教は「平等」ということを2550年以上ものあいだ、徹底的に、しっかりと守っています。勝手に縦の組織をつくって差別をつくることはできません。これは本当に仏教の不思議なところの一つなのです。

涅槃は不増不減

5 Bahū cepi bhikkhū anupādisesāya nibbānadhātuyā
parinibbāyanti, na tena nibbānadhātuyā ūnattaṃ vā
pūrattaṃ vā paññāyati.

世の中の河々が大海に流れても、雨が降っても、大

海においては減ることも増えることもないように、
多くの比丘たちが無余涅槃^{むよねはん}に達するが、涅槃におい
ては減ることも増えることもない。

【解説】

「無余涅槃」ということが、ちょっとわからないと思います。無余涅槃とは、完全に覚った人（阿羅漢）が亡くなることです。阿羅漢は一切の執着を捨てていますが、肉体はまだあります。苦しみはなくなりましたが、肉体はまだ残っていますから、肉体から生じる苦しみはあるのです。歩いたら疲れますし、お腹もすきますし、病気にもなります。そういう肉体の苦しみはあります。でも寿命が尽きたとき、その肉体も捨てるのです。「無余」というのは、余すところが無い、つまり涅槃に達した、という意味です。

そこで一般的によく言われるのは、覚った人たちが涅槃に入った——そうすると涅槃の人口が増えるのではないか、ということです。これはあり得ません。それから、誰も覚らなかつたら涅槃の人口が減って寂しくなるのではないか、と。これもあり得ません。海と同じなのです。人が涅槃の境地に入ろうが入らなからうが、それに関係なく、増えることも減ることもありません、と海に喩えているのです。

では、「涅槃」とはいったい何でしょうか？ これ、理解するのはむずかしいと思います。人は修行して覺りに達すると涅槃を体験しますが、それがどういうものなのか、誰も説明することはできませんし、言葉にもなりません。涅槃は、言葉にならない境地なのです。

あえて言いますと、仏教では「すべての物質は地水火風の四つのエネルギーのみである」と教えていますが、涅槃にはその地水火風がありません。また、時間も空間もありません。私たちは一般的に、時間と空間がなければ存在はないと考えています。存在とは、物理的に言いますと、空間をとっていることです。涅槃には、その空間がないのです。たとえば怒っている人を見て、「いま怒っていますね。今あなたに怒りがあります」というと、よくわかります。「はい、いま私に怒りがあります」と。しかし「怒りは身体のどこにあるのか、場所を指してください」と言うと、それはできません。「いま怒りは小指にあります」とか「いま耳に入りました」など、空間はないのです。脳のどこかにあるのかというと、それもわかりません。脳の機能が全体的におかしくなるだけです。だから怒りや嫉妬、憎しみ、喜び、慈しみなどの感情、それから認識は、空間をとらないのです。

しかし、時間はとります。時空次元で見れば、認識

には時間の次元はあります。「いま怒っている」というとき、「いま」という時間があるのです。それで五分たって「いま怒りがない」とすると、怒りは五分間あったこととなります。このように認識には空間はありませんが、時間はあるのです。

涅槃は、時間も空間も認識もない状態です。ですから覚っていない人には到底理解できることではありません。お釈迦様は「涅槃とはどういうものかと考えてはならない」とおっしゃいました。涅槃は言葉で語れるものではないのです。強いて言えるのは「究極の幸福・やすらぎ」であり、「人が目指すべき、達するべき境地」と、そこだけ明確にしています。仏道を実践すると、心が涅槃を体験するのです。

ですから「涅槃に入った」などとは言えません。阿羅漢が亡くなったということは、「涅槃になった」ということです。「涅槃に入った」ではなく、「涅槃になった」と言ったほうが正しいと思います。覚った人は誰でも「涅槃になる」のです。

そこで、無常も苦もない、人が達するべき涅槃の境地は、減ることも増えることもありません。海と同じなのです。涅槃は一切の現象が成り立ちません。人間の認識の対象にもなりません。したがって「減る・増える」だけでなく、言語が使える範囲や認識概念の範

囲も超えているのです。

目的は^{ただひと}唯一つ「解脱」

6

Evamevaṃ kho, pahārāda, ayaṃ dhammavinayo
ekaraso, vimuttiraso.

大海が「塩」という一つの味であるように、この教えも「解脱」という一つの働き（目的）である。

[解説]

お釈迦様の教えの目的は、^{ただひと}唯一つ、「解脱」です。それだけなのです。仏教経典は、この目的に沿って、しっかりと解脱のほうへ進んでいきます。途中で脱線することはありません。短い経典でも長い経典でも、最後には「解脱」で終わるのです。

パーリ文の中に ^{ラサ}rasa という言葉がありますが、rasa には二つの意味があります。一つは「味」、もう一つは「働き・機能」です。パハーラーダさんは rasa の一番目の意味の「味」を使って「塩という一つの味」と言っていますが、お釈迦様は rasa の二番目の意味を使って vimuttiraso 「解脱という一つの働き」と言っています。この場合は「味」ではなく「機能・働き」のことです。

お釈迦様の教えには「機能」があるのです。どういう機能かといいますと、「解脱に導く」という機能です。だから勉強するだけでも、心は知らないうちに成長し、解脱のほうへどんどん進んでいくのです。

お釈迦様の教えには、不思議な力があります。これは呪文やマントラのような力だと勘違いしている人もいますが、そういう類たぐいのものではなく、「教えに深い意味がある」ということです。教えの意味が理解できれば、たちまち心が清らかになるのです。たとえば、どうしようもなく悩んで落ち込んでいるとき、お釈迦様の言葉を一行だけでも読んでみると、その瞬間、電気を付けたようなかんじで心がパッと明るくなるでしょう。お釈迦様の言葉にはそのようなすごい力があるのです。これは呪文やマントラのようなものではなく、言葉の内容・意味の力です。「お釈迦様の言葉を変えたり入れ替えたりしてはならない」と言われるのは、そういう理由わけなのです。変えてしまったら、「言葉の意味」が崩れてしまいますから。

仏教は完全な教えです。経典にはあらゆることが記されています。日々どう生きればいいのか、仕事はどうすればいいか、お金の管理はどうすればいいか、など日常生活に役立つ教えから、政治、経済、教育などに役立つ教えがいろいろあります。

また、人間関係や心のやすらぎに関する教えもあります。最近、日本では多くの方が心のやすらぎを求めてカウンセラーのところに行っているようですが、仏教徒になったらカウンセラーに行く必要はなくなります。子育てのカウンセラーも、教育のカウンセラーも必要ありません。自分一人で問題を解決できるようになるのです。もし母親が仏教徒なら、完璧に子供を育てることができるでしょう。学校の問題も、教育の問題も、思春期の問題も、なんのことなく解決できるでしょう。その情報が仏教にはあるのです。ただ、項目として書いてあるわけではありません。「これから教育について語ります」とか「子育てについて語ります」「親子の問題について語ります」などとは書いてありません。でも、きちんと書いてはあるのです。たとえば、お釈迦様は比丘たちに「政治的な話は議論してはならない」と禁止されていますが、お釈迦様が政治家やリーダーたちに説法している内容を見ますと、いかにして国を正しく統治するかという政治の方法を教えているのがわかるのです。

それから、高度な知識や哲学、論理を学びたい方は、お釈迦様の教えをしっかりと学ぶなら、もう誰もかなわない理性的な人になるでしょう。

超越した能力の話もあります。私たちは今感情に溺

れて、情けない^{なさ}状態で生きていますが、人間はそんなものではなく、本当はすばらしい能力が備わっています。経典には神通力の話や、その能力の育て方なども記されているのです。

それで終わりません。宇宙の話もあります。もし宇宙研究者たちが経典を少しでも読んで勉強してみれば、「我々はここまで知らない……」と驚くことでしょう。

大量にある経典を読むと、お釈迦様はさまざまな人にたいして、生きる上で必要なアドバイスを与えているのがわかります。科学者にも、経済学者にも、家庭の奥さんにも、若者にも、子供にも、仏教から学ぶべきものがあるのです。ですから仏教は堂々と「誰でも来てください。あなたの役に立つものがありますよ」とオープンにしているのです。これは現代風に言えば、ウィキペディアのようなものです。そこには無数の情報があるのです。でも、ウィキペディアのようにいろんな人が訂正したり付け加えたりする必要はありません。仏教はすでに完成しているのですから。

このように、仏教の教えには何でもありますが、結局は「一つしかない」とも言えます。そこがまた仏教の不思議なところです。政治や経済、宇宙などの話はずいぶんチラチラと言うだけで、仏教のメインテーマにはなりません。仏教の教えは一貫して「心を清らか

にして解脱すること」にかぎるのです。いろんな話があるからといって、この目的からは微塵も脱線しません。どんな話も「解脱・涅槃」で終了します。これが仏教の不思議の一つなのです。

三十七の宝物

7 | *Ayaṃ dhammavinayo bahuratano aneka ratano.
Seyyathidaṃ - cattāro satipaṭṭhānā, cattāro
sammappadhānā, cattāro iddhipādā, pañcindriyāni,
pañca balāni, satta bojjhaṅgā, ariyo aṭṭhaṅgiko maggo.*

大海に宝物がたくさんあるように、この教えにも様々な宝物がたくさんある。仏教に隠れている宝物とはどのようなものか。それはすなわち四念処、四正精進、四神足、五根、五力、七覚支、聖八正道である。

[解説]

この偈では数字をおもしろく使っています。四、五、七、八と順番にもなっています。この経典は丸暗記する経典でしたから、私たちにとってはこのような数字のからくりがあったほうが覚えやすいのです。たとえば「七覚支」と覚えると、「覚支が七つある」ということはすぐにわかりますし、説法するときの一つ二つ

落とすことはなくなるのです。

仏教は「四」は好きな数字です。四聖諦（四つの聖なる真理）ですからね。四聖諦は四つに決まっているのです。真理はいくつあったっけ……よくわからない……ということはありません。「真理は四つ」と、数字といっしょに教えてあるのですから。

「四念処」というのは、心を清らかにし、解脱するための冥想です。これも身・受・心・法の四つにまとめてありますから覚えやすいですし、実践しやすいでしょう。身体（身）の冥想から始めて、感覚（受）の冥想に入り、心の冥想にも入って、なんのことなく真理（法）の冥想に進んでいきます。見事な組み立てになっているのです。

「四正精進」とは、四つの清らかな精進・努力のことで、仏教では努力は四つのみと教えています。この四つで、努力は完結するのです。四つとは、

- ・今やっている悪い行為をやめる努力
- ・いままでやったことのない悪い行為を絶対これからもやらない努力
- ・今やっている善い行為を完成させる努力
- ・いまだかつてやったことのない善い行為をする努力

これら四つの項目を満たすことで、努力は完成しま

す。世の中の人間の努力というのは、すべてこれら四つにまとめられるのです。

「四神足」とは欲神足・勤神足・心神足・観神足のこと。「五根」とは、信・精進・念・定・慧の五つの能力。「五力」とは、信・精進・念・定・慧の五つの力。「七覚支」とは、覚りに必要な七つの要素で、念・択法・精進・喜・軽安・定・捨の七つです。「聖八正道」とは、涅槃に至るための八つの実践項目で、正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の八つです。

ここでリストアップした項目はすべて覚りに達するために必要な条件であり、この上なく貴重な宝物なのです。

仏教は「生きることの科学」

お釈迦様の教えはすべて立証して語っている具体的な事実です。

たとえば、恐竜のことをいろいろ研究している恐竜研究者たちは、恐竜を再現するために実物大の大きな模型を作っていますが、模型はその時代で本当にそのような恐竜だったか、事実は誰にもわかりません。最近では声まで再現していますが、本当にその声だったのでしょうか？ 恐竜型ロボットもどこかで作っているようですが、それを見ると本当におもしろいですし、

いきなりガーッと口を開けて飛び出してきますから、恐くなったりもします。迫力があり、子供たちは大変喜ぶでしょう。でも、あの声は本当にその恐竜の声なのか、事実は誰にもわからないのです。

仏教は、この恐竜の話のようにいい加減な話ではありません。すべて立証して教えています。恐竜の話は単なる人間の推測にすぎず、そうだったかもしれませんし、まったく違うかもしれません。事実はわからないのです。それとは違い、仏教は「生きることの科学」です。今ここで自分が生きている、その科学ですから、立証できるのは当たり前のことなのです。

世の中にはさまざまな哲学や思想、宗教がたくさんありますが、それらはだいたい妄想や推測、先入観であり、単なる概念である場合が多いのです。その中には、心を汚す教えや間違った道に陥らせる教え（たとえばテロリストをつくる教えなど）もありますし、反対に、まじめで丁寧で、いくらか心を制御することのできる教えもあります。でも、それらの教えも完全なものとは言えないのです。

一切の概念を破り、真理を発見し、ありのままに観ることのできる智慧をもたらす教えは、仏教だけです。教えを実践していくと煩惱がどんどん消えていき、やがて一切の概念が破れて、智慧が現れるでしょう。究

極的には最終の解決策、いわゆる「解脱」が得られるのです。

心を完全に清らかにする道は、仏教以外、世の中にはありません。一切の苦しみを乗り越え、究極のやすらぎである解脱に達する方法は、仏教以外ほかにないのです。ただ、仏教の中でも部派仏教や宗派仏教になったりすると、それはなくなってしまいます。たとえば浄土真宗的な思想では「念仏を唱えれば救われる」と言っていますが、実際、念仏を唱えて本当に救われるのでしょうか？ 人格が向上するのでしょうか？ 心は完全に清らかになるのでしょうか？ 題目を唱えることはどうでしょうか？ 悪人にも題目を唱えることはできますが、唱えることで悪行為が完全にやめられるのでしょうか？ 心は清らかになるのでしょうか？ そのままなのです。

ですから「心を清らかにすること」に繋がっていない教えや修行法は、お釈迦様の教えとは直接関係のない別の話になるのです。

「心を清らかにすること」にかかわる教えも、世の中にはときどきあります。でもそれらも残念ながらすべて不完全なのです。たとえば、イエズス様の言葉に「左の頬を殴られたら右の頬も出しなさい」という有名な教えがありますが、この一行だけを聞くと、なん

となく良い言葉のように聞こえますが、同時に疑問や反論もいろいろ出てくるでしょう。この教えで言いたいのは、いわゆる「仕返ししてはならない」ということで、別の言葉で言いますと「自分の怒りを制御しなさい」ということですが、イエズス様はそこまで言ってないのです。「右の頬も出しなさい」と、それで終わりです。「なんだそれ、やられっぱなしでいいのか……」と聞きたくもなるでしょう。説明がありません。だから教えは不完全なのです。

お釈迦様の場合は、証拠や理由をしっかりと述べて教えています。「人に殴られたとき、もし自分が腹を立てて怒ってしまったら、その怒りによって自分の心が燃えて苦しみます。だから、自分の怒りを制御してください。怒りを制御することは、すばらしいことです。幸福への道です」と。他人を殴る人は自己管理ができずに怒りで燃えているのであり、そんな状況でも、あなたが落ち着いて、相手にたいし「どう、気がすんだ？」とニコッと笑うなら、あなたは立派な人なのです。

怒って殴り返すのは簡単ですが、自己制御は簡単ではないのです。

このように、世の中にある類似した諸々の教えと比較しますと、仏説は完全に語られていて異論を立てることができないということが理解できるでしょう。お

釈迦様以外の人々の智慧の言葉も大事ではありますが、異論を立てることも簡単にできるのです。

しかし、仏説はできません。だからといって堅苦しい暗い教えかというと、そうではありません。すべて立証して語っている具体的で明るい教えです。普遍的な真理を説き、実践する人には必ずなんらかの心のやすらぎや幸福が得られる、正真正銘の本物の教えなのです。

仏教は革命的な教え

仏教は革命的な教えです。でも、残念ながらこのことに気づいている人はほとんどいません。気づかないのは、私たちに智慧がないからです。私たちは勉強して知識は豊富にあります、その内容を理解して本当に納得していないのです。だから誰でも「まだ足りない、まだ足りない……。もっと、もっと……」と欲張って知識を増やすだけ。たくさん知識がなくても、得た知識の意味をしっかりと理解して、本当にそうなのかと納得することが一番大事なことです。もし仏教を真剣に学び、納得できたなら、仏教がいかに大胆革命的な教えかと驚くでしょう。

お釈迦様が 2550 年以上も前に「大発見しました」と言って最初の説法で説いた教えは、四つの聖なる真理、つまり四聖諦でした。四聖諦の第一番目は「生は

苦である」という苦の真理です。

でも、現代の哲学者や宗教家たちは、いまだに「生とは何か？」と考え、いい加減な答えを出しているようです。たとえば、キリスト教では最初にアダムとイヴがいて人類が誕生した。そして二人が罪を犯したため、その罪を人類全体が負わなければならない、などと言っていますが、ここで理屈が完全に崩れているのがおわかりになると思います。アダムとイヴが罪を犯したからといって、なぜ人類全体が罪人になるのでしょうか？ やはり、教えそのものがいい加減なのです。人間というのは誰でも不完全で、欠点だらけで、周りに誘惑されやすく、悪に陥りやすい。この現象をどう説明すればいいのか全くわからないから、このような物語を作って話すのです。

また、生命は親なしで無生物から自然発生した、と言う人もいます。原始時代、地球上に雷が落ちたり豪雨で嵐が吹き荒れたりなど激しい気候の変化があったとき、化学物質がゴチャゴチャしているところで、突然生命を構成するアミノ酸ができて生命が誕生した、などと言っていますが、この話もまだ仮説であり、証明されていないのです。

仏教は、生命や宇宙の最初の原因（起源）を探してはならない、と教えています。探すこと自体が間違い

なのです。なぜなら、すべての現象世界は「因果法則」で成り立っているのだから。私たちは因果法則を知らないだけで、よく観察するなら「原因があつて結果がある」ということが理解できるでしょう。原因があつたから、結果が出るのです。そうすると、その結果がまた原因になり、その原因がまた結果になる……そうやって順々にたどっていくと、結局は糸の始まりが見つからないのです。たとえば「Bという結果は、Aが原因である」という場合、Bという出来事の前にはAという原因があり、そのAの前には、また何らかの原因があります。その原因の前には別の原因があり、またその原因の前にはまた別の原因がある……これが限りなく続いていくのです。

ですから仏教は、人類の最初はどうだったかとか、地球の生命はどうやって誕生したかという起源のことは思考しても結論に達しない、としています。宇宙は現れて消え、現れて消え……きりがなく回転し、その中で生命も現れて消え、現れて消え……限りなく回転しているのです。

そこで、宇宙の起源を知ったからといって、いま生きている私たちには何の影響もないでしょう。今の生き方を改良するためには、何の役にも立ちません。役に立たない知識を追うことは無意味なことです。宇宙

の起源を知りました……だから何？ ということになるのです。「起原」というものは、最初から発見できない、成り立たない概念です。科学者には、地球がいつどのように誕生したのかということ进行研究することはできません。科学的に何かを発見すると、いままであった間違っただけの思考を直すことができますし、生命の誕生に関して、もし神話的なインチキ物語で一般の人々が脅されているとするならば、その恐怖感から人々を解放してあげることもできるでしょう。

でも実際には、宇宙も生命も際限なく現れて消えるものですから、起原というものはそもそも成り立たないのです。ですからお釈迦様は「生はどのように始まったか」ではなく、「生とは何か」という具体的な事実を見てください、と教えられました。よく観察するなら、「生は苦である」ということが発見できるでしょう。これは誰にも発見できなかった宇宙の普遍的な真理なのです。

生命を生かしているエネルギー

お釈迦様が発見された「四聖諦の苦」とは何でしょうか？

厳密に言いますと、私たちは「苦」があるから生きています。生命が生かされているエネルギーは「苦」なのです。たとえばお腹がすいたとき、もし「気持ち

いい」と思ったら何も食べないでしょうし、食べなければ死んでしまいます。お腹がすいたら苦しい——だから食べるのです。「食べたい、食べたい！」というすごいエネルギーが湧いてきて、食べざるをえない状態になります。このように「苦しみ」が「食べたい」というエネルギーを生じさせているのです。

そこで、何かを食べようとして、もしそれに味がなかったりすると、今度は「おもしろくない、いやだ、まずい……」などと不満を感じるでしょう。味が無いものは、お腹がすいていてもあまり食べる気にはなりません。これもまた苦しみです。それで調理法や味付けをいろいろ変えて、苦しみをなんとか消そうとします。

立っていると苦しいから座り、座っていると苦しいから立ちます。息を吸ったら苦しいから吐き、吐いたら苦しいから吸います。

家にいる時なぜテレビを付けるかということ、退屈だからです。退屈は苦しみでしょう。部屋にいるとき、楽しくて楽しくてたまらなかったら、テレビは付けません。つまらないから、付けるのです。

では、なぜテレビを消すのでしょうか？ 番組がおもしろくないか、つまらなくなったからです。ほら、苦しいでしょう。ですから、テレビのスイッチを入れ

るのも苦しみがあるからですし、消すのも苦しみがあるからなのです。

外出するときにもテレビを消しますが、これも同じ苦しみが原因なのです。付けっぱなしで出かけることは不安材料になります。おもしろい番組を見ているとしましょう。でも、外出する時間になります。そのとき、「遅刻したら大変！」というちょっとした恐怖感が起こるのです。番組自体はおもしろいのに、「遅刻する」という恐怖感が優先してしまい、テレビを消さなければならぬのです。このように調べると、人のいかなる行動についても、それらは苦しみがやっているという事実が発見できるでしょう。

このように、私たちは苦しみによって生かされています。食べるのも、運動するのも、おしゃれをするのも、結婚するのも、人間関係を築こうと頑張るのも、なんでもかんでも苦しみがやらせているのです。その苦しみは天にあるのではなく、私たちの身体に具体的にあります。「楽しいからごはんを食べる」というのは間違いで、それはその人の観察能力が乏しいだけ。ちゃんと客観的に観察するなら、「空腹という苦しみがあるから食べる」ということが発見できるでしょう。

今も皆さんは手足を動かしたり、首を傾けたり、髪の毛を触ったり、いろいろ身体を動かしているでしょ

う。それは苦しいからです。なんとなく気持ちが落ち着かないか、気分が良くないか、しっかりしていないから、動くのです。どんな小さな動きも、苦しみがやらせているのです。

そこで、他宗教が「生命を生かしているのは絶対神だ」と証拠もない概念を語っているのにたいし、仏教は「苦」という誰でも具体的に立証できる事実を教えてください。この事実を知るだけでも、私たちはどれほど楽になるでしょうか。どうか神様助けてくださいとお祈りすることはなくなりますし、お金があったら幸せになるからガツガツ儲けるぞといった、あの途轍もない欲望も苦しみも一発で消えて、いきなり心が穏やかになるのです。

ですから、お釈迦様の教えというのはこの上ない宝物です。唯一の宝物なのです。金銀財宝などは心を汚すもので、宝物ではありません。仏教では宝石や財産を毒蛇に喩え、「触れるな」と教えています。皆さんは高級な宝石が手に入ったら楽しいでしょう。でも、楽しいどころではなく、大変なストレスの原因にもなります。その宝石のせいで執着ばかりして、心が汚れてしまい、不幸になる可能性が大いにあるのです。

これに対し、何の危険もない正真正銘の宝物というのは、お釈迦様の真理の言葉・教えです。これ以外ど

こを探しても、安全で真に価値のある宝物は他に見つ
けることはできないのです。

八種の偉大なる人格者

8

Ayaṃ dhammavinayo mahataṃ
bhūtānaṃ āvāso. tatrime bhūtā. sotāpanno
sotāpattiphalasacchikiriyāya paṭipanno, sakadāgāmī
sakadāgāmiphelasacchikiriyāya paṭipanno, anāgāmī
anāgāmiphelasacchikiriyāya paṭipanno, arahā
arahattāya paṭipanno.

大海には巨大な生命がいるように、この教えも偉大
なる生命の^{すみか}住処である。偉大なる生命とは、預流果
に達した者、預流果に達する道を歩む者、一來果に
達した者、一來果に達する道を歩む者、不還果に達
したもの、不還果に達する道を歩むもの、阿羅漢果
に達したもの、阿羅漢果に達する道を歩む者である。

[解説]

海には巨大な生命がいるように、仏道には巨大な人
格者がいます。その巨大な人格者、つまり偉大なる大
物の^{もの}を、八種に分けています。これは仏教以外にはあり
ません。

八種とは、預流道・預流果、一來道・一來果、不還道・不還果、阿羅漢道・阿羅漢果です。それぞれの語尾に「道」または「果」が付いていますが、「道」というのは原因のこと、「果」というのは結果のことで、たとえば預流道は預流果になるための原因である、という意味です。

仏教を学び、実践しようと思いついた時点で、その人は他の人とは違い、大物であるということが出来ます。理性的で科学的で、真理を発見しようではないか、心を清らかにしようではないか、と頑張っていますから、凡人のレベルを超えているのです。

そこで、修行して最初の覚りに成功したら「預流果」と呼ばれます。まだ煩惱はいくつか残っていますが、預流果というのは「流れに入った」という意味で、そのまま涅槃までまっすぐに流れて行くのです。預流果に覚ったら、聖者です。俗世間を乗り越え、聖なる世界（聖者の世界）に入っていますから、もう誰もかないません。だから「偉大なる人」と呼ばれるのです。迷信や神秘などはもうひとかけらもありません。

仏教で聖者とは誰かという、この八種の人格者です。預流果から阿羅漢までが「聖なる弟子・聖者」と呼ばれるのです。これは他人に認めてもらって聖者に認定してもらうということではなく、自らが心を清ら

かにし、自らが達するものなのです。他の人から認定してもら必要はまったくありません。

お釈迦様が涅槃に入られる前のこと、ある人がお釈迦様にこのような失礼な質問をしました。

「お釈迦様の教えには一番目の覚り、二番目の覚り、三番目の覚り、四番目の覚りの四つの段階がありますが、覚れるのは仏教だけですか？」

このとき、お釈迦様は高齢で身体が病気でしたから、なんの躊躇も遠慮もなく、このように答えられました。

「仏教と関係なく、四聖諦を発見して修行すれば、誰でも覚りに達します。覚りに達するには、四聖諦を発見しなければなりません。しかし私以外に四聖諦を説いている人は世の中にいません。だから一番目の聖者も、二番目の聖者も、三番目の聖者も、四番目の聖者も、仏教にいるのであって、他宗教にはいません」と。

お釈迦様は最後の最後、疲れていらっしやっただけでしょう。普通はこのように率直に、自分だけが真理を語っている、と言うことはありません。でも、この『パーラーダ経』は涅槃に入られるよりもずっと前のお話ですから、「仏教には大物がいる」とそれだけ言って終わるのです。

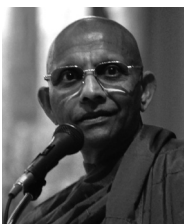
おわりに

この経典は、「仏教とは」という自己紹介のような経典です。仏教はただ単に信仰するものでも、拝むものでも、祈るだけのものでもありません。人格が確実に向上する具体的で実践的な教えであり、試す・やってみる・実践する教えなのです。

実践するなら、この世ですぐに何らかの結果が現れます。死後、天国に行けますとか幸福になりますなどは言いません。死後の世界の話ではなく、いま生きているこの世界で結果が現れるのです。戒律を一つ守っただけでも、善い結果が得られることが経験できるでしょう。

仏教に似た教えは世の中にはありません。これもはっきりしています。仏教は宗教とも言えませんし、科学とも言えませんし、哲学でもありません。日常生活の中で正しく生きることを教えていますが、日常論を語っているだけでもないのです。

これが仏教の不思議なところですが、経典にはあらゆる教えが含まれつつも、その教えの一つ一つは「普遍的な真理」を説いているのであり、実践する人を確実に「解脱」へと導く「最高の幸福」を教えているのです。



アルポムッレ・スマナサーラ長老

スリランカ上座仏教（テーラワーダ仏教）長老。1945年4月、スリランカ生まれ。13歳で出家得度。国立ケラニヤ大学で仏教哲学の教鞭をとる。1980年に来日。駒澤大学大学院博士課程を経て、現在は（宗）日本テーラワーダ仏教協会にて初期仏教の伝道と冥想指導に従事し、ブッダの根本の教えを説き続けている。朝日カルチャーセンター（東京・横浜など）講師を務めるほか、NHK教育テレビ「こころの時代」などにも出演。

著書『ブッダの実践心理学 アビダンマ講義シリーズ』『怒らないこと』（以上サンガ）、『原訳「法句経」一日一悟』（佼成出版）、『ブッダー大人になる道』（筑摩書房）、『仏教は心の科学』（宝島社）など著書多数。

パハーラーダ スッタム
仏道の八不思議 **Pahārāda Suttaṃ**
お釈迦様の教えの特色

発行日 2011年5月14日 初版第1刷

著者 アルポムッレ・スマナサーラ長老
発行者 小西淳一
発行所 宗教法人 日本テーラワーダ仏教協会
所在地 〒151-0072 東京都渋谷区幡ヶ谷1-23-9
電話 03-5738-5526
FAX 03-5738-5527
URL <http://www.j-theravada.net>
E-mail info@j-theravada.net
振替 00120-5-763914
印刷・製本 八紘社印刷有限会社